

消 息

藤浪剛一先生没後五十年祭の報告

平成四年十一月二十一日、連休前の土曜日の午後、藤浪剛一（こういち）先生没後五十年祭記念講演会が行われた。日本医史学会と慶応義塾大学放射線科学教室の同窓会葆光（ほこう）会の共催であった。

藤浪先生が亡くなったのは昭和十七年十一月二十九日である。本邦放射線学の草分けであり、名著『医家先哲肖像集』（昭和十一年）の著者、日本医史学会の第四代理事長であった。この理事長時代に現在われわれが手にしている学会誌が今の形態になり、『中外医事新報』から『日本医史学会雑誌』と改名したのである。

講演会会場は東京新宿の高層ビル街の中にある株式会社コニカの会議室であった。司会の平松京一慶應義塾大学放射線診断部教授は父上が藤浪先生の理学的診療科開講時代からの弟子の一人という深いつながりがあった。

開会の辞 橋本省三葆光会長  
あいさつ 蒲原宏日本医史学会理事長

あいさつ 細田泰弘慶應義塾大学医学部長

藤浪剛一先生の経歴

大村敏郎慶應義塾大学医史学客員教授

兄・藤浪鑑先生のこと 岡田靖雄日本医史学会評議員

教室開講と放射線物理学 橋本省三葆光会長

五十年忌を迎えて藤浪剛一先生をしのぶ

玉木正男大阪市立大学名誉教授

閉会の辞 酒井シヅ日本医史学会常任理事

また出席できなかった関西から日本医史学会の杉立義一理事から、藤浪剛一先生の書いた「海内第一泉」という城崎温泉の中心部にある石碑のスライドが届けられ紹介された。藤浪先生は温泉学の大家でもあった。

講演会には約百人の出席があり、広い範囲にわたる話題が提供されたため、会場も盛会であったが、その後会場を移しての懇親会においても、日頃の医史学会だけの集会とちがって多彩な多くの実りある交流が行われた。

平成四年十一月二十九日、丁度御命日の夕刻、京都の御遺族藤浪みや子様をお訪ねして、五十年祭行事の報告をしてきた。そのお宅は藤浪鑑先生の住んでおられた当時の姿をそのままにした東山地区の一角であった。

なお講演会の記録は葆光会により、淡い藤色の表紙の小冊子となつて、当日の会員の他、第94回日本医史学会総会にも配布された。残部が少々あるので、御希望の方は大村までお

知らせいただきたい。

川崎市がん検診センター所長、〒211川崎市中原区小杉町  
三一二六二電話 ○四四一七三三一一五六

(大村 敏郎)

### 湯島聖堂保存修理工事竣工

### 湯島聖堂創建三百年事業完成記念会

第二次世界大戦中、大成殿をはじめ諸施設が焼夷弾により破損され、昭和初期の復原工事以後補修もされなかつたので、昭和六十一年以来、斯文会を中心として保存修理工事が行われた。ようやく七年余の歳月をかけ、故伊東忠太東大教授が設計、建設された昔日の姿にもどることができた。

平成五年三月二十九日、大成殿において約百五十名余の関係者が集り、保存修理の完工と湯島聖堂創建三百年事業の式典を行った。

当日は風が強かつたが晴天に恵まれ、鳩山邦夫前文部大臣をはじめ、徳川家からも代表が出席された。本会からは蒲原宏理事長が祝意を表したが、本学会名誉会員でもあり東洋医学会の重鎮である矢数道明氏も参じられた。参加者には記念メダルが贈られた。式典後、斯文会館において伝統的な江戸木遣り、詩吟が披露された。神農廟のある森はこれを祝うごとく美しい木の芽が萌えていた。

(蒲原 宏)

### 「処士独嘯庵墓」再建について

江戸時代の中期の古医方の大家、永富独嘯庵は名著『漫遊雑記』により、病理解剖の必要性を説き、華岡青洲に乳癌手術のヒントを与える等、近代医学の種子を蒔いた天才的な医傑である。

大阪市天王寺区上之宮町四番地の曹洞宗蔵鷲庵にある「処士独嘯庵墓」は、昭和四十年の二百年忌追遠祭以降、墓碑の風化剝落が更に甚しくなり、現状を留めえぬ状態に至つた。

「処士独嘯庵墓」の再建事業の経過報告——

①蔵鷲庵に於て第一回会合 平成四年九月十五日

参会者、寺師睦宗、長門谷洋治、岡村芳樹、中嶋哲夫(独嘯庵九代目子孫)、蔵鷲庵住職磯田芳竜、棟近美代師(石浅石材店主)

お墓の現状について協議、二百年祭の主催者である寺師先生の発議により、明春三月彼岸までに再建する事を決定す。

②独嘯庵顕彰会の再発足

独嘯庵顕彰会

発起人 日本先哲医家の墓を守る会々長 寺師睦宗

日本医史学会理事長 蒲原 宏

東亜医学協会々々長 矢数道明

事務局 大阪市天王寺区上本町六―三―三二―四〇五

岡村クリニック